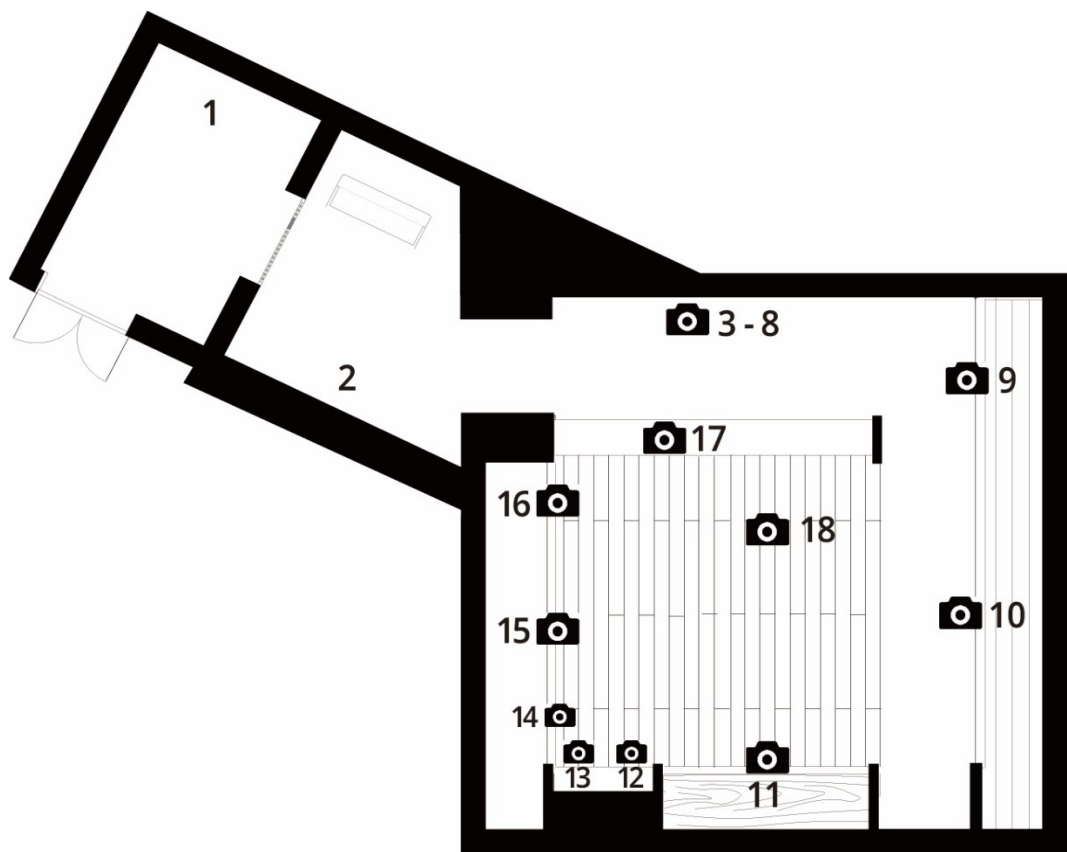


この、原美術館 ARCという時間芸術

会期：2025年3月15日 [土]－5月11日 [日]、5月16日 [金]－7月6日 [日]

主催・会場：原美術館ARC



 マークの作品は写真撮影が可能です。

展示室内では飲食および、作品に触れることはできません。小さいお子様は大人の方と手をつないでご鑑賞下さい。

特別展示室 観海庵					
	作家名	作品名	制作年	素材・技法	サイズ / 員数
1	崔在銀	もう一つの月	2010	ビデオインスタレーション	可変
2	篠田桃紅	通	2003	朱、銀泥、和紙にプラチナ箔	35 x 80 cm
3-8	 蜷川実花	PLANT A TREE	2011	Cプリント	各 48.5 x 72.8 cm
9		青磁鳥形水注	高麗時代 (10～14世紀)	磁器	一口
10	 狩野派	花鳥図屏風〈三井寺旧日光院客殿障壁画〉	桃山～江戸時代 (16～17世紀)	紙本墨画	六曲一双
11	 伝 酒井抱一	寿老草花図	江戸時代 (19世紀)	絹本著色	三幅対
12	 草間彌生	ドッツ・オブセッション、水玉で 幸福いっぱい	2011	携帯電話 (Art Editions YAYOI KUSAMA, KDDI iida)	
13	 草間彌生	宇宙へ行くときのハンドバッグ	2011	携帯電話 (Art Editions YAYOI KUSAMA, KDDI iida)	
14	 草間彌生	私の犬のリンリン	2011	携帯電話 (Art Editions YAYOI KUSAMA, KDDI iida)	
15	 狩野派	花鳥図〈三井寺旧日光院客殿障壁画〉	桃山～江戸時代 (16～17世紀)	紙本墨画	四幅
16	 須田悦弘	枇杷	2000	木に彩色	40 x 32 cm
17	 作者不詳	関ヶ原御陣図 (下)	不詳	紙本著色	一巻
18	 戸谷成雄	地霊	1991	鉄、木、灰、アクリル絵 具、ガラス	32 x 119 x 61 cm

* 番号の記載はございませんが、須田悦弘の小さな作品を展示しています。

■作品解説

3-8. 蜷川実花「PLANT A TREE」 2011年

「蜷川カラー」と呼ばれるその色とともに、アイドルやモデル、花々の輝きを捉えた写真がポジティブで開放的と評される一方で、華やかさや幸福感と隣り合わせにある歪みや澱み、衰退の影や死の気配をも捉え続けてきた蜷川実花（1972-）。本作は、2010年の春、目黒川の桜が川面に散る様を取り憑かれたように3時間撮影し続けた写真であるという。当時、プライベートな理由で傷心していた蜷川が、桜の散りゆく物悲しさとともに移ろう風景の一瞬の輝きを焼き付けた作品である。

10. 狩野派「花鳥図屏風*」 紙本墨画 六曲一双 桃山～江戸時代（16～17世紀）

15. 狩野派「花鳥図*」 紙本墨画 四幅 桃山～江戸時代（16～17世紀）

水際で遊ぶ鴨や岩にとまるセキレイ、松の枝にとまる山鳩のつがいなどが潤いのある墨づかいで描かれている。花鳥図は、近しい関係の人物と会う部屋に描かれる例が多く見られ、水鳥は豊かさと幸福を、つがいは夫婦の和合と子孫繁栄を、鳩は平安を象徴している。

***三井寺旧日光院客殿障壁画** は、もと滋賀県大津市の三井寺（園城寺）の日光院客殿を飾っていた障壁画である。原六郎が明治25年（1892）、財政難で障壁画の維持に困難があった三井寺から日光院客殿を建物ごと買い取ったもので、品川区の自宅庭園内に移築し、名を慶長館と改めて保存した。桃山時代末期ないし江戸時代初期建立とされる建物は、昭和3年（1928）に文京区の護国寺へ寄進・再移築され、護国寺月光殿として今日に至る。現在は保存の観点から建物とは別に保管し、49幅の掛軸幅と6曲1双の屏風に仕立て直されている。現存する障壁画群の絵画様式について、客殿北側三室と南側二室において主として2グループに分けて考え、元信筆と伝えられるグループと永徳筆と伝えられるグループに大別される。すなわち、前者は桃山時代、後者は江戸時代の作と推定されている。

この作品群が散逸せず、まとまった状態を保って伝えられたことには大きな意義があり、狩野永徳（1543-90）をはじめ、近世初期の狩野派による重要な作例として注目されるものである。

11. 伝 酒井抱一「寿老草花図」 絹本著色 三幅対 江戸時代（19世紀）

中幅に旭日と寿老人、左右幅に春と冬の草花を描いた三幅対。寿老は中国の伝説上の人物、老子の化身などといわれ、巻物を付けた杖を携え、鹿をとまうのが定型である。日本では七福神としてよく知られているが、短身に長い頭、長杖か巻物を持つ寿老図は、七福神の図像の中では福祿寿（ふくろくじゅ）に近く、二神は混同同一視されることもある。本図では不死の霊薬を含むという瓢箪を腰につけ、巻物を両手に持ち、左右に描かれた草花と取り合わせ、季節のおめでたい床飾りに仕立てられている。

抱一（ほういつ、1761～1829）は、姫路城主の次男として江戸に生まれる。狩野派、円山派などの諸流派を学び影響を受けるが、なかでも尾形光琳（おがたこうりん、1658～1716）を慕い、琳派（りんぱ）を江戸の地に開花させた。俳句もたしなんだ抱一は、季節の変化を詠みこむ繊細で軽妙な精神を光琳の画風に加えた江戸琳派を確立したことで知られている。